

小学4年生になる息子の夏休みの自由研究は「マンホール蓋のふしぎ」。マンホール蓋に描かれているデザインや大きさ、材質、内容を調べることが目的であった。息子と私はコンベックスで大きさを図り・写真を撮影した。熱中症になってもおかしくない暑さの中で、道路上で観察している姿は、さぞかし怪しい親子に見えたであろう。マンホール蓋はたくさん存在し、盛岡市制130周年デザインの「さっちゃん」とふっちが自宅周辺に存在していたことに驚いた。多くの社会インフラが自分の生活の中に溶け込み恩恵を受けていることを改めて感じていた私の脇で、マンホール蓋のデザインがカッコいい！と言っている息子に、私の気持ちが通じるはずもなかった。

私のインフラ魂に火がつき息子の研究を補助する名目で、帰宅してからインターネットを調べたところ、面白いほど多くの情報があった。全国のマンホール蓋デザインの紹介をはじめ歴史、機能、耐荷重が確認できた。あたかも自分が以前から知り得ていたかのようにそれらの情報を息子に伝え、研究は完成した。

身近にある多くの社会インフラは機能を果たしている一方で老朽化問題が進んでいる。「最後の警告ー今すぐ本格的なメンテナンスに舵を切れ」は、平成24年に発生した笹子トンネル天井版落下事故を踏まえ、平成26年4月「道路の老朽化対策の本格実施に関する提言」の冒頭文である。メンテナンス業務に従事する私にとって大きな衝撃となった。

建設業時代にコンクリート打設から養生の管理は生き物を扱うほどの大変な作業であり、構造物が完成した際は作業員全員で喜んだのを覚えている。そのコンクリートが凍害や塩害を受けて劣化した姿

を、コンサルタントに転身して点検業務で目の当たりにした時は、非常に悲しかった。

メンテナンスの仕事は、かかりつけの医師に例えられる。構造物にとって点検・診断・修繕・管理方法により寿命も変化する。そう考えると携わった構造物には運命を感じる。数多くある中で供用年が100年近い開運橋や九年橋・珊瑚橋・府金橋は特に思い出深い。循環式プラスト工法や主桁連結工および高機能防水等の高耐久のメンテナンス性を考慮した修繕工法を積極的に採用した。修繕後の状況もやはり気になるので定期的に会いに行き行って状況を観察している。

適切なメンテナンスには老朽化のほか多くの課題も存在する。30年後の2050年では総務省による生産年齢人口予測では32%減の5000万人、国土交通省によるメンテナンス・更新費の推測結果では1.3倍の6.5兆円など明るい予測傾向とは言えない。さらなる追い打ちが地震や豪雨・台風の自然災害である。国土交通省による1時間降水量50mm以上の年間発生回数は1975年に比べ2.75回/年の増加傾向を示す。

このような背景の中、未来に健全なインフラを残すことは容易ではない。数多くある課題の解決策は職種の異なる連携であると考え。岩手県では技術士会をはじめ、岩手県インフラ研究会、岩手県のコンクリートを考える会などの行事が開催され新技術や劣化・修繕の事例等の紹介によりメンテナンス技術の向上が図られている。残念ながら今年度はコロナ禍で活動自粛を余儀なくされているが、これら職種の垣根を越えた継続活動が、きっと、いや確実に良質なインフラを未来に残すことにつながるであろう。明るい未来のために！